

①廻郡する村々の村況（村免高・庄屋名・本高・新地高・物成高・田畑の面積・竈数・人数・牛馬数・産土神・社家・寺院・高札板・名所・古城跡・山・川・池沼・橋・出屋敷・里程・峠・御腰掛・御野立・枝村など）、②手永ごとの竈数と高齢者名とその数、③徳人（苗字・脇差・上下御免の者）、④孝人褒賞、⑤納税褒賞、⑥社人名前、⑦大村よりの諸方里数、⑧御廻郡御順道里数書、⑨長崎行、⑩御留木（伐採を禁止された樹木）、⑪御廻郡御行列、⑫御用意宿、⑬御案内、御付添大庄屋名前、⑭御先払郷筒名前、⑮廻郡世話方、⑯焼失家、⑰酒造人名前、⑱養育子覚、⑲社倉米、⑳御賄方、㉑御家中渡人馬、㉒御菓子出御人数、㉓御下宿割、㉔御廻郡御休泊附、㉕御本陣役割となっており、藩主廻郡の意図・対応が事細かに記録されている。

七 勝山町域を通過した人たち

貝原 益軒

貞享元年（一六八四）一月二十二日、幕府は、「武徳大成記」や「関ヶ原軍記」・「大坂軍記」などを木下順庵に編修させるため、幕臣や諸大名に対して、家譜及び史料の提出を命じた。それで、福岡藩主黒田長重は、その編修調査を藩儒貝原益軒に命じたのである（『日本庶民生活史料集成』第二巻）。

益軒は、大友義統と黒田如水が戦った石垣原合戦の古戦場視察のため、元禄七年（一六九四）四月朔日、豊前・豊後地方へ

の、二〇日間の旅へ出た。このたびの旅は、家族や衣笠半助ら門下生十数名を供連れの、藩命による公式なものであった。『豊国紀行』は、このときの見聞録である。

四月朔日、福岡荒津（現、福岡市荒戸）の自宅を発った益軒は、飯塚―直方―香春を経て、五日には七曲峠を越えて、上野新町の「馬驛」（宿駅）に到達している。

鏡山村を過行ば、其東に、七曲とて高き嶽あり。東西上下の坂、凡一里ばかりあり。其山上は田川、京都両郡の境なり。山上より東北の方、海陸の詠めいとよし。山の東は京都郡なり。

七曲東の麓に上野村有。其西に障子嶽あり。天正十四年、黒田孝高の攻め落し給ひし城跡あり。高橋右近元種が端城也。高山也。

上野新町は七曲嶺を東の方に下だりつくして上野村のなを東に有。馬驛也。香春より一里十七町有。

上野新町の宿駅を通過した益軒は、黒田孝高の謀略で悲惨な最期を遂げた国人領主宇都宮鎮房の居城城井谷を見るため、天生田から西城井谷に入り、光富村を経て、節丸村在住の惣庄屋助右衛門宅に投宿した。翌六日は、山を越えて東城井谷に入り、椎田に出て宿泊。その後、松江―中津高瀬―大貞―如水原―四日市―宇佐八幡宮―豊後高田―木付―日出を経て、黒田如水（孝高）が関ヶ原の戦いの際、大友義統を破った別府市北郊の石垣原の古戦場を実地に見て、十二日は別府の湯宿に泊まった。十三日、別府より船に乗って府内（現、大分市）へ上陸し、

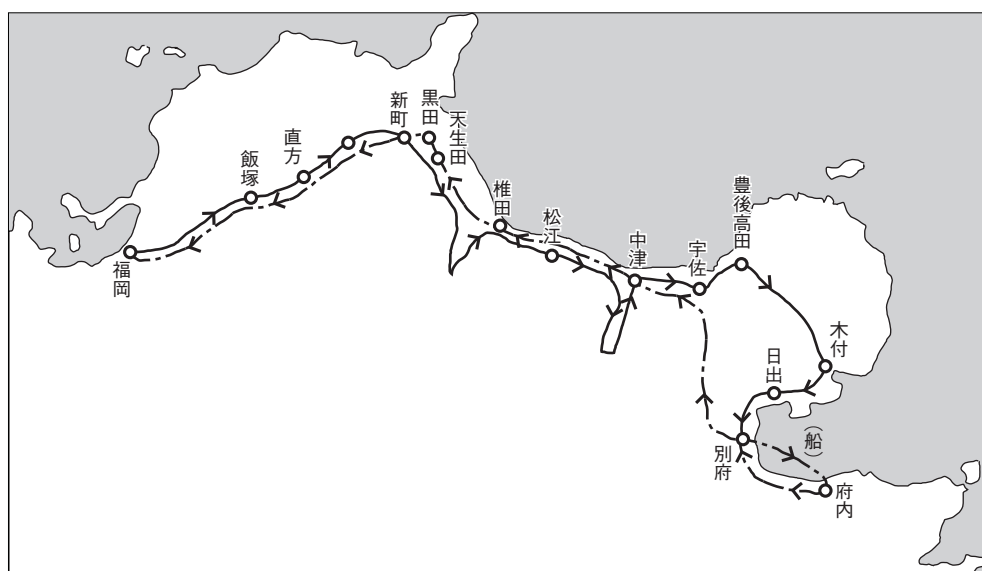


図5—20 貝原益軒『豊国紀行』のルート

城下の名勝・旧蹟を訪ねてゐる。

帰路は、

四月十六日

朝、別府を

発ち、鶴見

原
—
鉄輪 かなわ
—

佐田を経

て、
四日市

の庄屋宅に

一泊した。

十七日

四日市を

いで中津

に
い
た

る。香月

氏に道に

て
あ
い

ぬ。
とも

なひて彼

家にいたりいこひて後、寶蓮坊にいたる。彼兩人を伴なひ、高瀬川の方に行。折ふし小雨そぼふる。わかれをなしてかへりぬ。小今井をすぎ、八屋をとほり、椎田にゆきて又しばしいこう。筑城(築)をすぎ、天生田あまふだを通り、馬ヶ嶽のほとりに行ば、日すでにくれぬ。中津にて香月氏・寶蓮坊などかへるさにならず黒田村によりて大なる窟を見よと云。けふ黒田村に宿すれば、明日直方迄いたるに便能からんとおもひ、夜中にたどりゆきて、黒田村の彌三右衛門が家を尋ね、其邊りにやどをかりなんとせしかども、彌三右衛門わがもとに宿せよとしきりに云へば、いなびかたくてとどまりぬ。あるじよい・あさ盛饌をまうく。

十七日、四日市を發つた益軒は、中津で偶然、名医香月半山に会い、帰路の途中、勝山町中黒田の綾塚（女帝窟）を見るように言われた。小今井―八屋―椎田と、豊前道をたどった一行は、椎田道（椎田―築城―国作―天生田）へ入り、そして天生田から香春道（天生田―大谷―西谷―久保―新町―上野―鏡山―香春）を通り、この日は黒田村の彌三右衛門宅へ投宿した。

十八日、益軒は、中津で会った香月半山の勧めどおり、黒田村の石窟（女体権現）に入った。巨大な石窟の神秘さに感動した益軒は、その時の光景と感慨を詳しく紀行文に書き記している。

十八日、宿りをいで、朝、黒田村の石窟にいたる。其深さよこに入事十間、おくの間は疊八でうつらぬるばかり。其まへに疊四でうしくほどなる所三所あり。其高さは七、八尺あまり。おくのまは大理石を一を以て

三方をつくり、まへなる所も皆大石をかさね、中間に四柱ありて上の石をさへり。凡窟いはやはいづくにも多けれど、いまだかやうの大にしていさぎよきは見待らず。是は人力にてなせる所なり。おくの間に大なる石のひとつ有。此さき或者其内に財ありなんやとてふたをうちわりて見しに何もなかりき。里人はこゝを女體権現と云。いかゞしたる故やらんいぶかし。口は南にむかへり。彌三右衛門が曰、四極山はつは企救郡に属せり。海邊にある高山也。今は貫山ぬき（北九州市小倉南区にある山。標高七二二メートル）と云。七曲坂の山の北の末也。其北に笠結嶋ゆいありて相對す。其間相さる事半里ばかり。笠結嶋も又企救郡にありと云。此説いぶかし。豊後に又しはつ山・笠縫嶋あり。又企救郡千佛（北九州市小倉南区平尾台Ⅱカルスト台地の西部にある鍾乳洞）とて大なる窟有。精霊が窟の南にあたる。佛多し。是はほらにはあらず。およそ豊前の内所々に窟多と云。予彌三右衛門にわかれを告て、それより上野をすぎ七曲りの坂を越へ、香春の驛に休み、夏吉の二の窟に入。境村（現、直方市内）をすぎ、申の時ばかり（午後四時ごろ）に直方の新町につきぬ。あけの日は其所にとゞまり、廿日の日福岡へかへりぬ。

益軒ら一行は、新町・上野村を経て七曲峠を越え、香春駅でひと休みし、直方新町で二泊。二十日、福岡に無事帰着した。益軒、時に六十四歳であった。

三浦梅園

豊後国の国東半島安岐（現、大分県東国東郡安岐町富永）の儒医三浦梅園が、長崎に遊んだときの紀行文に「帰山録草稿」（岩波文庫『三浦梅園集』）がある。

安永七年（一七七八）八月十四日、安岐を發つた梅園ら一行一二名は、豊後高田―中津―三毛門（豊前市）―求菩提（同）―寒田さわだ（築城町）―帆柱（犀川町）を経て野峠を越え、彦山を参詣して、二十二日、小石原に出た。そして、石櫃（夜須町）―宰府―善導寺―久留米―柳川―大川―佐賀―武雄―川棚―大村―長与を経て、九月六日、長崎へ到着した。長崎には、およそ一か月近く滞在して、名勝・旧跡を訪ねている。

帰路は、十月三日に長崎を發ち、松原―彼岸―嬉野―唐津―雷山―博多―香椎―宗像を経由し、十月七日には青柳（古賀市）に投宿している。

十月八日 曇天。青柳より赤馬（赤間）四里。大黒や松尾□兵衛□名□同といふ処にて銀かへ、下界村（現、直方市下境）幸七といふに宿す。青柳よりあぜ（畦）町へ式里、あぜ町より赤間へ式里、赤間より下界村迄五里、この間赤間よりうえ（植）木、々よりのふがた（直方）、この下にこやのせ（木屋瀬）あり。あかま、うえ木の間、北の方によく二子山に似たる山あり。さかひ村の前、はたた島といふ大山、東にあり。土手をさかひにして西上さかひ村はちくぜんくらてぐん（筑前鞍手郡）、東は鋤木田村（現、赤池町）豊前田川郡、鋤木田より上野村（同）・べん上（弁城）村（方城町）・伊方村（同）・夏吉村（現、田川市）・下河原（下香春）村・香春村、是迄三里半とならふ。鏡山田河郡終り。七まがりと山をこし、京都郡上野村・同新町半宿。久保村、堤（津積）村、西谷村、大谷村、是より中津（仲津）郡雨田（天生田）村。ここに南中津、東小倉の

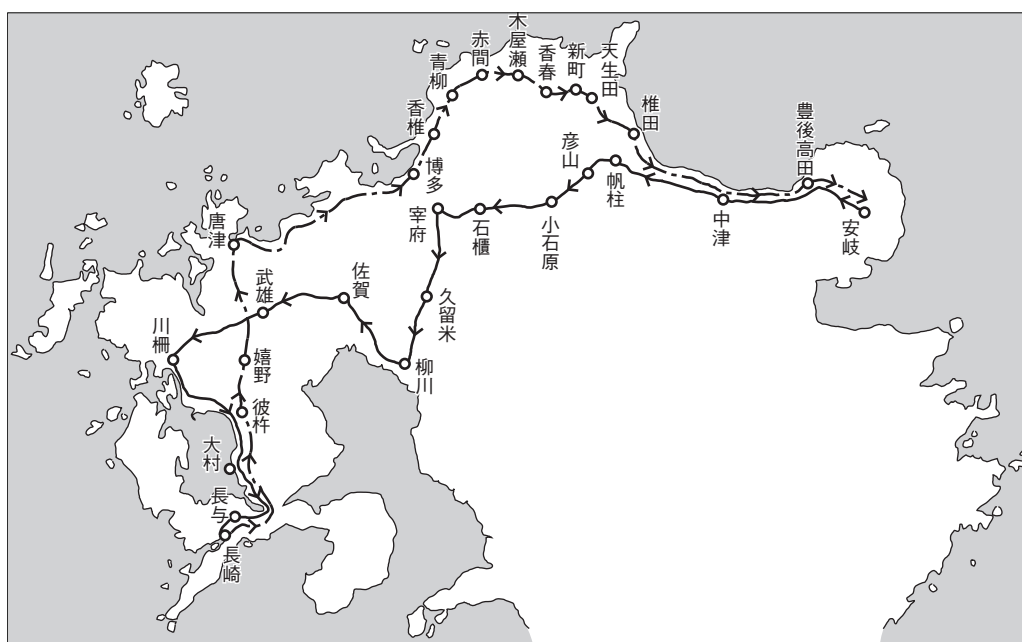


図5—21 三浦梅園『帰山録草稿』のルート

追分（南は東、東は北の誤か）、今川をわたり、矢どめ（矢留）村、八景山・妙見あり。国分村（現、豊津町）、あざみ、些見とかく。筑城村（現、築城町）、九里。○此さかひ村も元石あり。

十月八日、梅園ら一行は、青柳宿（現、古賀市）より赤間宿（現、赤間町）を通り、この日は下界村（現、直方市下境）の幸七宅に投宿した。

十月九日 時々時雨。下界村より二里ばかり来りたるに、宿やより予落したるはなかみ人もち来る。香春岳、香春町の左にあり。さかひ村より河春迄三里半。香春より新町迄一里半、此間に七まがり峠あり。是田河郡、京都郡の界なり。べふ田の池のほとりよりこなた中津（仲津）郡。こよひ日くれてこくさこ（国作）村庄右衛門といふ農家にやどる。此下べふ（別府）といふ村より筑城郡（築上郡）。此こくさこ村の西（南の誤か）、国分寺あり。国分村といふ。けふ道づれの物がたりに、筑前のけん見（検見）は奉行よき所をみて升を入、百姓あしき所を見て升を入れ、是を合せて二つにわり、たね歩ふち引て□□するよし也。さて新町よりこくさこ迄二里、合せて七里。

十月九日、梅園らは、香春町東入口の追分から「香春道」に入り、鏡山から七曲峠を越えて勝山町域の上野村、そして新町に辿り着いている。文中に、「同新町半宿」とあるように、当時、新町は半宿、つまり「間ノ宿^{あいしゆく}」であった。

新町宿駅から久保―津積―西谷―大谷と、「香春道」を通って天生田に至り、今川を渡河し、矢留―国分―些見―築城と、

「椎田道」を通り、豊津町国作の農家庄右衛門宅に投宿した。

十月十日、国作を發ち、椎田―植野（中津市）を経て、善光寺前の次右衛門宅に一泊。そして、十一日、梅園は、豊後高田を経て、無事、安岐町富永の居宅へ帰着した。梅園、時に五十六歳。およそ二か月に及ぶ、二度目の長崎紀行であった。

野田成亮

日向国佐土原の修験野田成亮は、平四郎（町人）という剛力（従者）を伴い、文化九年（一

八一二）九月三日、佐土原を出立以来、文政元年（二八一八）十一月六日に帰着するまで、六年二か月にわたる長い托鉢（たくはつ）を経て、日本全国の名山靈蹟（れいせき）を巡拝した。『日本九峰修行日記』は、その日々の旅日記である。九峰とは、英彦山・石槌山・箕面山・金剛山・大峰山・熊野山・富士山・羽黒山・湯殿山である。このうち、四国の石槌山は、従者の平四郎が先年すでに四国遍路の折、登拝していたので、旅程からは外され、実際に登拝したのは八峰である。

一年目の年末は長崎で迎え、豊前地区は二年目で、成亮五十七歳であった。八月朔日に太宰府を發った成亮は、久留米―福島―北野―小石原と托鉢し、九月二十二日には九峰の一つ英彦山に登拝している。そして、小竹村―日田―羅漢寺―宇佐―豊後高田―中津と配札し、十月十一日には求菩提山に登拝。十三日に椎田、十七日に今井、十九、二十日には大橋町で托鉢、配札をした。

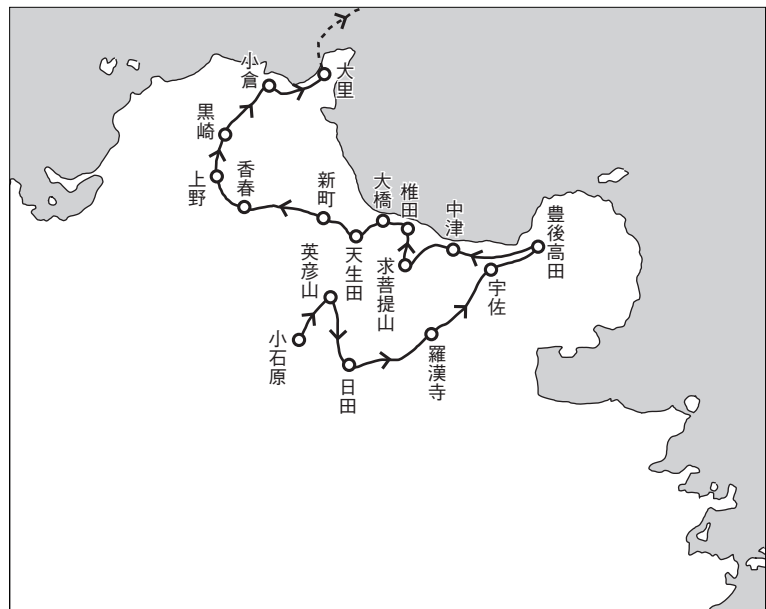


図5-22 野田成亮『日本九峰修行日記』のルート

廿一日 當所配札し、昼時より出立、小倉街道新町と云ふに宿す。

二十一日には大橋町で配札後、「小倉街道」―「小倉道」（大橋―流末―天生田）をとおり、天生田から「香春道」（天生田―久保―新町―上野―鏡山―香春）に入り、大谷―西谷―久保を経て、新町（勝山町）に一泊した。

廿一日 晴天。新町配札。昼時出立、七曲りと云ふ峠を越へ香春と云ふ宿へ下る。(以下略)

二十一日は新町で配札、昼ごろ出発し、七曲峠を越え、香春町に宿泊した。その後、上野―黒崎―小倉城下―内裏(大里)と配札、赤間ヶ関を渡海し、長府へと、残り七霊峰の旅を続けたのである。

このように、博多と府内(現、大分市)を、「香春道」・「椎田道」・「小倉道」・「中津道」などで結ぶ、このルートは、貝原益軒・三浦梅園らの文人や野田成亮ら旅の山伏、そして役人や旅人たちが通る重要な街道であった。新町宿駅は、この歴史街道の中継宿(間ノ宿、半宿)として繁栄した。

第二節 近世の通信

一 飛 脚

古代・近世 遠隔地に書状や金子・荷物などを運送するもの
初頭の飛脚 として「飛脚」があった。広義での飛脚としては、平安時代の飛脚使による「脚力」があり、鎌倉時代には、継馬による「鎌倉飛脚」があった。鎌倉―京都間の所要日数は、五日から七日が多く、緊急便は昼夜疾走し、その所要日数は、三日から四日であった。また「六波羅飛脚」もあった。

蒙古襲来に対する九州警固のため、鎌倉―博多間には、文永の役直後に通送制度が創始され、文永十一年(一二七四)に九・十一・十六日前後、弘安四年(一二八二)には六・七日で書状や金子・荷物などが通送された。

秀吉の朝鮮出兵では、文禄元年(一五九二)に京都・大坂―名護屋間に諸大名による継飛脚・継舟が設けられ、飛脚継夫・船頭・加子に一定の賃金が支払われている。若松―赤間―博多―唐津―名護屋を結ぶ唐津街道筋に継飛脚の往返が行われたのである。

継飛脚と 寛永十年(一六三三)、江戸幕府は、諸街道の大名飛脚 宿駅において人馬を継ぎ替え、御状箱や御用物を通送する脚夫に継飛脚給米を与えることによって、幕府公用の「継飛脚」を実質的に設置した。

江戸を中心に五街道の宿駅が整備されると、飛脚の制度も著しく発達し、江戸―京都間の通送時間は、元禄十三年(一七〇〇)の八二時間が、宝暦十三年(一七六三)には六八時間に短縮された。

諸大名も公用飛脚の「継飛脚」にならない、江戸―領国間を往復する「大名飛脚」を開設した。

有馬久留米藩では、延宝三年(一六七五)に、江戸―久留米間の往復月並飛脚がはじまり、伝言物の斤目一〇〇匁につき駄賃四分を徴収した。明和四年(一七六七)には、江戸―定飛脚